佐々木智之のテクニカル講座 上級者を目指せ！ ステップアップ編

第4回 NHK杯全日本選抜の戦いを回想

今回は実戦編として、先日終わったばかりのNHK杯全日本選抜選手権で、私がどのように戦ったかをお話しします。事前に発表されたプログラムシートから、どのように考えてボールのラインナップを組んだのか、そして実際の試合ではどうだったのかなど、ボールの使い方を中心に振り返りたいと思います。

講師・佐々木智之

ささき ともゆき／1986年7月18日生まれ、神奈川県出身／2003年からナショナルチーム在籍、現在プレイングコーチキャプテン／NHK杯全日本個人選抜選手権で4度の優勝のほか、国内外で個人戦及びチーム戦で優勝多数／ヒサカプロショップ所属

シフトごとに使用ボールを想定、8個のボールをラインナップ

今回のコンディションは42フィートの長めのミディアムオイルパターン、量は34.55ミリリットルとかなりのヘビーオイル、そして難易度に影響するレシオ（比率）は、右が4.35：1、左が4.09：1と左右で若干の差がつけられていました。ちなみに昨年は2.96：1でしたから、今年の方が易しい設定でした。

それに対して私が用意したボールラインナップは、下記の8個です。

◎ジェム（ロトグリップ）◎DNA（ストーム）◎クルーズゴールド（900グローバル）◎エクストリームリアリティ（900グローバル）◎アブソリュート（ストーム）◎ウルヴァリンダークモス（900グローバル）◎ブラックウィドーブラックウレタン（ハンマー）◎ブーヤー（900グローバル）

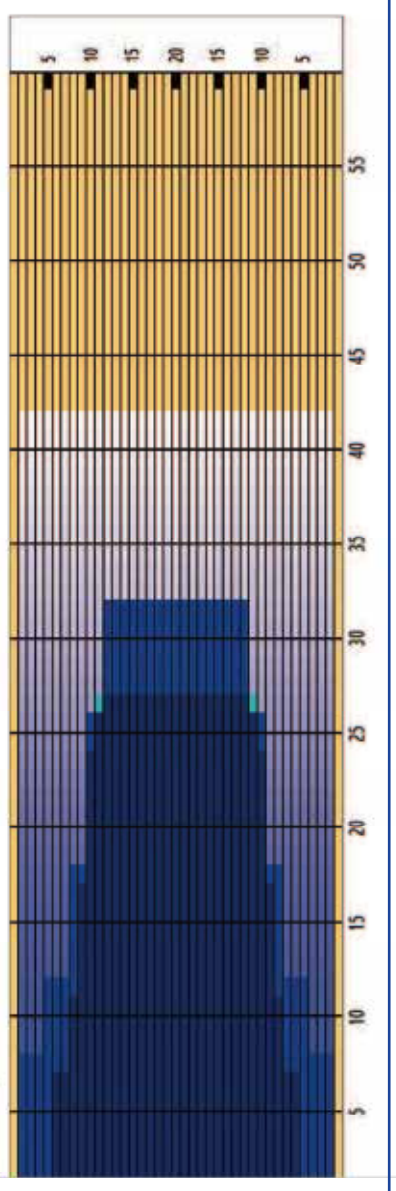
私は通常持ち込むのは6個ぐらいですが、NHK杯が去年まではコロナ対応で人流を減らすための6Gから、今年は3Gシフトに戻って、投げる時間帯がまちまちになったので、8個用意しました。

ジェムとDNAは、手前からかんでくれるようなボールで、朝イチの使用を想定しました。クルーズゴールド、エクストリームリアリティ、アブソリュートの3つは、万能な感じで、女子が投げたあとの2シフト目や4シフト目で使えるかなと思ってラインナップしました。ウルヴァリンダークモスは、走るボールなので、第4シフトのレーンが遅くなってきたときのために用意しました。

▲今回の主なボールラインナップ

今回は約4：1という比率だったので、ウレタンボールはいらないかなと思いつつ、保険でブラックウィドウを1個入れましたが、結局は使用しませんでした。ちなみにブーヤーは、スペア用のボールです。

NHK 杯オイルパターン



準々決勝は走るボールでタイトに攻めたのが奏功

実際のゲームではどうだったかをお話しします。

予選1回戦は、女子が投げたあとの第2シフトでしたが、クルーズゴールドとエクストリームリアリティを使用して642点でした。第4シフトの2回戦は、アブソリュートとエクストリームリアリティを使って613点。この2回戦は、絞って投げると曲がってしまうし、ちょっとでもふくらませるとワッシャーになる感じで、自分にとっていちばん投げづらい時間帯でした。初日の6Gを1255点。66位で、予選落ちの危機でした。

3回戦は2日目の朝イチで、2G目までジェム、3G目に DNAを使って686点。ある程度想定したとおりのレーン変化で、自分としては結構投げやすい時間帯でした。その結果22位で予選を通過しました。

▲予選3回戦は想定どおりジェムが効果的だった

▲準々決勝と準決勝前半は、ウルヴァリンダークモスが活躍してくれた

準々決勝は、男子3回戦のあと女子が3回戦を投げ、そのままリメンテなしということで、前日の2回戦に近い変化の状態からのスタートでした。2回戦が中間のボールでどっちつかずの状態だった反省を踏まえ、思い切っていちばん走るウルヴァリンダークモスで、あまり幅をとらないでタイトに攻める投球のイメージに変更しました。それがうまくいき、前半675、後半692で、10位で準決勝に進出しました。

準決勝は最終日の朝イチ。といっても前日の3回戦とは感じ方が違っていて、オイルは多いけど奥の動きが緩やかな印象でした。決勝進出4位のボーダーまで158ピンあったこともあって、3回戦のジェムや DNAではなく、思い切ってウルヴァリンダークモスで、5枚から3枚ぐらいの大外を投げる勝負に出ました。結果719を打つことができました。しかし後半はキャリーダウンしてきて曲がりが足りなくなってきたので、4G目からアブソリュートに替えて636。8位で終戦となりました。

まとめ―キャリーダウンへの対応の仕方がスコアを左右

結局初日の予選1、2回戦の出遅れが響いた形になりました。とくに2回戦、オイルがなくなった夜のシフトのときに、私は手前のブレイクダウンを気にしてオイルがある方、ある方にとどんどん中に入っていった。おのずと入射角度が取りづらくなるので、ポケットヒットはするけど⑩ピンタップが増えるという状況になってしまいました。

結果論ですが、翌日の準々決勝と同じように、2回戦のときにも走るボールで外側からタイトに攻めるという発想があったら、もう少し結果は違ったかもしれません。

今大会で私の想定外だったのは、オイルが4：1という比率で、外のオイルが薄いにもかかわらず、右投げでもウレタンボールを使う人が多かったことです。その分手前のオイルのなくなり方が早かったり、キャリーダウンが強く出ていました。

また予選はボックス7人打ちでしたが、3回戦で私が入ったボックスなどは、7人中5人が両手投げでした。全国大会のなかでも、出場資格が厳格に決められている NHK杯で、これだけ多くの両手投げの選手がいることに驚きました。

▲初の両手投げチャンピオンは誕生しなかったが、男子は（左から）西山響選手が1位、浅海恒成選手が2位で決勝に進んだ

その傾向はこれからも加速することが予想されますし、高回転の両手投げボウラーが増えるということは、コンディションの変化も当然激しくなります。今大会でも、キャリーダウンへの対応がうまくいったかどうかが、スコアに直結した感がありました。